なぜ精神科医を志し，その分野を自らの専門としたのか

特集にあたって

松 本　俊 彦

編集子が専門とする依存症分野では，最近，治療転帰に関して興味深い知見が得られた。薬物依存症当事者が運営する民間支援団体「ダルク」の利用者を対象としたコホート研究「ダルク追っかけ調査」(研究責任者：嶋根卓也）によれば，依存症からの回復に影響するのは，ミーティングや各種プログラムへの参加態度の熱心さではなく，むしろ先行く仲間（ダルク職員）のなかに自身のロールモデルを見出せたかどうかであるらしい。

逆にいえば，たとえミーティング中，ずっと居眠りをしていたとしても，あるいは，「我々は薬物に対して無力であり……」で始まる，依存症自助グループの12ステップが，まるで腑に落ちなかったとしても，それは大した問題ではない，ということになる。大切なのは，「あの人みたいになりたい」というロールモデルだ。

なるほど，そういうものなのかもしれない。実際，現在ダルク職員をしている元患者からも，こんな話を聞いたことがある。

「自分の回復に一番影響したのは，憧れている○○さん（ダルク職員）と一緒にサーフィンに行ったことですかね。しらふで楽しそうに波に乗ってるその人の様子を見ていて，なんか格好いいなって思って……」

「依存症と一緒にするな」とお叱りを受けそうだが，精神科医が「一人前になる」というプロセスにもそれと似たところがある。恥ずかしながら自身を振り返ってみても，駆け出しの頃，機会を見つけては，先輩医師が精神科医を志した理由や，現在の専門分野を選択した経緯を聞いてまわっては，周囲から怪訝な顔をされていた記憶がある。おそらく当時，編集子は，自身のロールモデルに飢えていた。とはいえ，診療業務の合間に質問するのはいささか憚られる話題だ。だから，大抵は，日中の診療業務を終えた夜の時間帯，ずるずると医局に居残っての談笑の際に，あるいは，酒席のどさくさに紛れ，酩酊の勢いを借りて質問していたものだ。

こうした経験を持つのは，編集子ばかりではあるまい。

「なぜ精神科医を志したのか」

質問される側からすれば，藪から棒に感じられるかもしれないが，聴く側にとっては切実だ。10年，あるいは20年後，はたして自分はどんな精神科医になっているのか，あるいは，なっていたいのか，それには，今をどうすごしたらよいのか。検討にあたって参照するデータベースには，先輩たちの現状の知識や臨床技術に関する情報だけでなく，その背景にある個人史に関する情報も必要である。つまり，その人はどのような経緯から精神科医を目指し，どういった経緯で現在の分野を自らの専門としたのか？自分と重なる部分があるのか，ないのか？最初からその分野にストレートに突き進んだのか，それとも紆余曲折だったのか。何らかの臨床上の体験がその分野に向かわせたのか，あるいは，単なる偶然か？

ただし繰り返すが，こうしたやりとりはやはり夜間限定の活動だ。夜だからこそ，先輩たちも気を許し，自己開示してくれたのだろう。その意味では，業務終了後にだらだらと夜遅くまで医局に

居残ったり，あれこれと口実をつけて酒席を設けたりするといった，いかにも「社畜」めいた修行生活にも，それなりに意味があったように思う。

ところが，コロナ禍に突入して以降，状況は一変した。職場の先輩や同僚と集まって談笑したり，酒席をともにしたりする機会がめっきりなくなったからだ。これは若手にとって大きな損失だと思う。というのも，彼らが失ったのは，教科書や公式なカンファレンスの場では知ることのできない，貴重な「耳学問」の場だけではないからだ。これからのキャリアにどのような選択肢があるのかを知り，自身のロールモデルを探す機会をも失った可能性があるのだ。

そこで，今回，本誌では，夜の医局や酒席での語らいの誌上再現を試みた。執筆をお願いした著者の方々は，さまざまな年代と専門分野，立場にわたっており，原稿依頼の内容は，いささか乱暴なほど「ざっくりとした」ものであったにもかかわらず，多くの方が企画に賛同してくださった。それどころか，いつもの特集よりも原稿の集まりが良かったばかりか，いずれの著者も，いつもの学術的原稿に比べて，心なしか筆運びが弾んでいるように感じられたのだ。

実際，読ませる文章ばかりだ。本稿執筆前，集まったゲラ刷りを何気なくめくっていたら，気づかぬうち引き込まれ，結局，すべての原稿を一気呵成に読了してしまっていた。どの原稿からも各著者の肉声が聞こえてくるうえに，「あの先生はそういう経緯で……」「あの先生にもそんな時代が……」といった発見や驚きが多いからだ。そして，さまざまな肉声は響き合い，重なり合って，あたかも「誌上医局旅行」の様相を呈している。

目論見は大成功だ。著者の諸先生方には，この場を借りて深謝申し上げたい。

いつもとは少し異なるテイストの精神科治療学――「夜の精神科治療学」――をぜひご堪能いただきたい。